春江だより

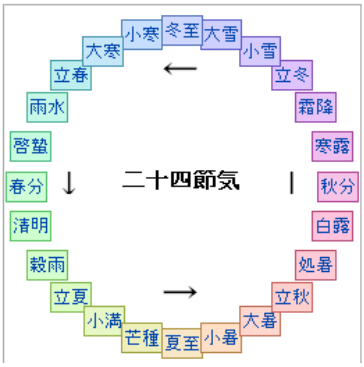
第10号
平成25年2月1日

節分の話

副校長　鷲田　睦

余寒なお厳しき折、地域、保護者の皆様にはますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。

さて、この、季節のご挨拶ですが、正確には２月４日の「立春」からのものです。いまさらではありますが、２月３日の節分にあわせ、全校朝会で「日本の季節の考え方」「節分について」話をしようと考え、少し調べてみました。普段当たり前のように行っている季節の行事や挨拶にも、歴史や風土と深く関わりがあることが改めてわかり興味深かったです。それによると、



・もともと節分の日は、太陽の動きから数千年前に中国で考えられた「二十四節気」をもとに、冬至（一番夜が長い日）、春分（その中間）、夏至（一番昼が長い日）、秋分（その中間）の日の、さらに中間の日である「立春」「立夏」「立秋」「立冬」の前の日をいうこと。

・中でも「立春」前の節分には、１年の始まり（昔は立春のある月を１月としたそうです）を前にし、厄払いをする大切な日として様々な行事が行われてきたこと。

・この時期は、疫病が流行ったり、災いが多かったりすることから、「邪気（邪鬼）が入ってくる」とされ、その魔物を滅するということで、「鬼は外」と豆（魔滅・マメ）をまくようになったこと。

・季節の挨拶はこの節気を節目に変化すること。　　などがわかりました。

様々な事柄が中国や日本の歴史や風土、さらには古代の天文学などと深くつながっており、人々の暮らしや願いが形になったものであるということが改めて確かめられました。現在もこの季節、インフルエンザや急性胃腸炎などが流行し世間で話題になるなど、「邪鬼」による仕業ではないかと疑うような災いが多くなります。昔の人々が豆を投げて撃退したくなるというのはとても理解できます。他にも、「齢の数だけ豆を食べる」という話も、栄養価の高い豆をたくさん食べて体の中から元気にするということで、理にかなっているなと思いました。

日本気象協会の資料によれば、日本の平均気温の変化をグラフにして二十四節気を重ねると、ちょうど立春の前後が１年で最も寒い時期にあたり、この日から立夏に向け気温が少しずつ上昇していくということです。まさに立春は「春が立つ」節目であり、人々が、昔から春（ハレ）の日を迎えるための準備を始める日として大切にしてきたことも納得した次第です。

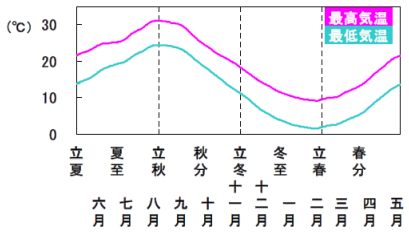


図　東京の日別平年値（気温）その１

春江小学校も、新しい晴れの日に向け、いよいよ本格的に準備が始まりました。児童のため、地域のため、よりよい一年となるよう全力で取り組んでまいりますので、地域、保護者の皆様にはなお一層のご理解ご協力をいただきますようお願いいたします。

蛇足ですが、鬼が角を生やし虎のパンツをはいているのは、邪鬼が「鬼門」（丑寅・うしとらの方向）から入るとされることもわかりました。これもまた納得です。